



第38号

さらしなの里

友の会だより

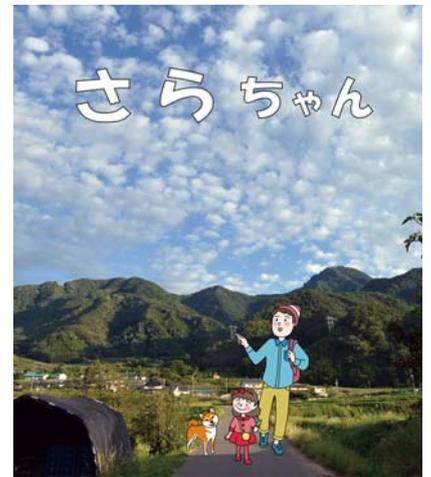


2018・春



おとうさんは「きょうは、さらが、すんでるところが、よくみえるところに、いっよ」といいました。
さらちゃんも「リョクサクを、せめて、ことうげに、やってきました。」「お、すごい。とおくまで、よくみえるね。」「さらの、おうち、どのへんかな。」

よるになると……



ふゆのあさ
「さら、そとに、でてごらん、ゆきがふったよ」
かみりやまが、ゆきげしやうです。あたりいぢめん、しろく
なっています。あさひが、あたり、あかく、そまっています。
「わ、きれい！」

「さらしなの里」に「さらちゃん」誕生

「さらしなの里」を舞台にした絵本「さらちゃん」ができあがりました。「さらしな」の地名を教育や経済に活用することを目指す「さらしなルネサンス」が、平成29年度の千曲市協働事業として取り組んだものです。

絵本は「さらちゃん」という女の子がお父さんと一緒に、里の代表的な風景を訪ね、里の美しさを体験していくお話。最初に訪ねるのは初春のあんの花畑。初めてあんの花見をしたさらちゃんは、あんのソフトクリームも食べます。続いて初夏、姨捨の棚田に水が張られ、泳ぐこいのぼり。梅雨があけるころは冠着山の頂上で舞っているヒメボタルを見に行きます。そして秋、冬の美しい風景を訪ね、再びあんの花が咲く春……。さらちゃんは1年後にどんな成長をしたでしょうか。四季折々の実際の写真に、動物、昆虫、花などかわいイラストが入っています。さらちゃんとお父さんのイラストの表情や服装の変化も見どころです。千曲市の保育士5人の方に制作メンバーに加わってもらい、なによりも親子で手に取りたくなる絵本を目指しました。発刊を記念した集いを4月28日、千曲市総合観光会館で開き、「さらちゃん」についてのシンポジウムも行いました。制作メンバーの保育士柳澤敏子さんは「美しいものを体験した感動は、大人が自分の言葉で子どもに伝えることが子どもの成長に大事」と語りました。

絵本は全部で3000冊印刷。1800冊を4月、千曲市内の全園児に贈呈。700冊は来年と再来年の新入園児用として保管します。残る500冊は図書館などの公共施設や報道機関などに贈り、さらしなルネサンスの活動展開のために使います（新会員に贈呈、年会費千円）。販売はしません。上の写真は表紙・裏表紙、絵本の見開きページの一部分です。

(芝原区・大倉善邦)

資料館のパンフレット リニューアル!



さらしなの里歴史資料館のパンフレットがリニューアルされました。写真がいっぱいです。春夏秋冬、歓喜、さらしなの里の歴史がテーマになっています。

誰もが、もう一度訪ねたい場所だと感じるよう、数年掛けて撮り集めた写真

中から選りすぐりのものを使用したとのことです。【さらしなの里】の豊かさが目に飛び込んできます。

パンフレットを手にしたら気になり、いつか行ってみたい、一度来たなら、もう一度来たいとなるようなパンフレットです。

リレイ
里麗エッセイ

ジャパニーズ ボブテール

羽尾4区 小口修二



名前はしっぽ。二歳のメスで、妻いわくジャパニーズボブテール（日本古来の原種）との事。空き家に、野良から生まれた一匹で、わが家で飼うことになった。その足で、すぐ動物病院へ。受付で診察券をつくる時、名前をきかれた。まだ考えてもない。丸まった短い尾がかわいいので「しっぽでいい」と言っ

て決まった。

犬も何匹か飼ったし、亀もいる（二十五歳）。猫は以前いた猫が初めてだったが、猫はまた特にかわいい気がする。室内飼いで、外には出さない。

ただ生まれてすぐにわが家へ来たので躰ができていない。普通は親猫や兄弟によって、ツメを出さない、かみつかないと、かわからずにきてしまい、悪気もなく、ツメを出し、良い事だと思ひ噛む（甘噛みだろうが、けっこう痛い）。ダメでは効かない、いけません、が一番効く。

人間だと思っているのか、寝るときも、妻の横でちゃんと顔を出して同じ姿勢である。湯たんぼがわりにはならない。

押し入れの戸を開ける姿はまるで小さい人のよう。立ち上がって両手をかけて、カ一杯頑張っている、そして開ける。

顔が逆三角形で丸まった短いしっぽ、後足が前足より長い。妻が丸顔の耳折れが飼いたかったと言っていたが、わが家の癒しの係として、しっぽは役割を果たしている。

「自然には勝てない」

第25回縄文まつりは雨で中止



第25回さらしなの里縄文まつり。あいにくの雨で中止となったが、自然と「共存」し外は雨でも更級小学校児童も大人も縄文の心を次回へとつないだ。開催予定日は昨年10月29日。まつりの日が近づくと、台風22号が日本の南を東よりに進んだ。まつりの準備をする前日の28日も雨の予報、今年の開村は誰もが無理だと思ったに違いない。しかし春以来、まつりのネギ、サツマイモ作りに汗を流し収穫。入念な打ち合わせ会議は25回を記念のまつりにすべく、知恵を

しほり各係は係員の確保等準備万端だった。しかし数日前の豪雨により雄沢川は一時濁流と化

更級小は体育館で縄文集会

した。

水が引くとイワナ、釣りの担当係長等数名がスコップ片手に



ついて駆けつけた釣りの係長の安堵の顔。そして準備の前日を迎えた。



祭壇も新たな豊穡儀礼の工夫を凝らして完成。すべての部署で準備完了した。シトシト降る雨の中、明日の晴れを祈りつつ充実した顔で帰路につく。実施の判断は29日朝6時30分とした。しかしこの段階は本降り。来賓の方々へ無念の連絡。

ただ、例年まつりを担ってくれている更級小学校は、これまでの学習や準備の成果を披露する縄文集会を体育館で開催した。外は雨でも縄文人になりきって演じる児童。父兄も縄文芸能村に大満足だった。

さて入念に準備した古代体験パークは雨に打たれながら黙々と片付け。自然には勝てない。縄文時代は人間が一方的に自然を利用して生きるのではなく、人間も自然の一部だからこそ、自然を壊さない。これからもこの祭りを大事にしたいと雨に濡れながら思った次第。(さらしなの里友の会会長・縄文まつり村長 豊城巖) 写真は更級小の縄文集会の様子、ケーブルネット千曲制作DVD「2017千曲市3大古代祭り」から

集まった。取水口が土砂に埋まり縄文池が取水不能、生け簀にイワナの放流もできない状態に。長い導水路を力を合わせて土砂を取り除いた。病をおして杖を

予報は雨だったが、雨粒はなし。女性の皆さんのネギ、サツマイモ、肉だんごの仕込みも手際がいい。雲の厚くなる中、イワナの燻製下ごしらえもした。雨がポツリと降り始めた。それでも縄文村入口の幟立て、青竹のアーチの組み立て。高齢者が大半だが力を合わせ立派な仕上がり。

懐に入っていくような感覚

さらしなの里歴史資料館館長 緑川茂



おらほの冠着 36

自宅（千曲市内川の北端）から見る冠着山は、両翼を大きく広げ、リング畑の最上部から頂上までが見え、たぶん真正面を向いているのではと思っっています。近からず遠からず、この距

離感が最も美しく見える場所ではないかと密かに思っているところです。

ここ「さらしなの里歴史資料館」に通うようになり一年が過ぎました。

内川からふもとに通勤1年

曲線を進むと、遠近法のごとくあたかも冠着山の懐に入っていくようでもあり、これまた最高のロケーションです。

四季折々、それぞれの表情を見ながら職場に着きますが、陽

県道姨捨停

車場線を西に進み、五加

小学校を過ぎ、土手前の

左カーブを上

がってくる

と

仙石から扇状

地をせり上が

る雄大な冠着

山の姿が迫っ

てきます。

冠着橋架け

替え前は、朱

のトラス部分

が視界をさえ

ぎっているよ

うに感じられ

ましたが、新

橋は幅員も広

く、中央部が

高い緩やかな

があたりくつきりときれいな姿が見えた日は、朝からとても得をしたような気分になります。

冠着山を身近に感じるもう一

つの理由として、旧戸倉町時

代に林務係に配属となり、冠着

山に関わるようになったことか

らと思えます。仙石線の舗装工

事、冠着山線の法面工事、坊城

平キャビン建設、また財産区有

林の撫育作業など数多く山に通

いました。

山での作業は体力的には大変

ですが、山は静かで、空気もヒ

ンヤリ、山からエネルギーをも

らっているようでとてもリラッ

クスすることができました。今

もときどき山登りをしています

が当時の経験からかもしれませ

ん。

今年はずいぶん冠着山に登

ろうと思えます。

編集後記 今号は、友の会だより

初めてとなる「別刷り」を発行し

ました。さらしなの里歴史資料館

で3月に開かれた、アポリジニアア

ートの講演会を詳報するものです▽

学芸員の翠川さんが長年、温めて

いた企画で、アートの根源を深く

考えさせるものでした。アートと

いうのはなにか特別の人たちのも

のだと考えがちですが、生きてい

くために、後世につないでいくた

めに必要なことが結果的にアート

になっていたということですので▽私

たちの周りにはどうでしょうか。

編集・発行

さらしなの里友の会だより編集委員会

(事務局・さらしなの里歴史資料館)

〒389-10812

長野県千曲市羽尾247の1

電話 026(276)7511

fax 026(261)4161